詠む広場

毎日歌壇

水原紫苑 選

春愁や返し縫ひめく老いの日々　東京　石橋万喜子

すしめしに布巾ふんはり花菜風　和歌山市　曽根　澄子

源流は県境あたり出水川　津山市　森下　弘

かさぶたをきれいに剝がす夏隣　東京　嶋村　純

新緑やふるさとの山深呼吸　柏市　小畑　昌司

アパートの窓に小さきこいのぼり　太田市　服部千鶴子

十階の病室にまで遠蛙　富士見市　田中　芳二

革製のブックカバーや桜桃忌　東京　小峯　和弘

うたをよむことはしんだひびのことおもいかえしてまたわすれさること　横浜市　大原　香花

〈評〉日本文学という大きな物語を背負わされた明朝体の静かな決意。

ほんたうは赦せなかつた　紫陽花も雨に立ちをり炎のごとく　東京　山野ゆかり

限界は定めたけれど限界に向けて走った　雪の結晶　横浜市　永永　キヌ

罌粟の花ひらかむとして罌粟坊主ゆるるは風の贅ならなくに　東京　吉岡　耕大

あさがおの言葉を覚え乙女らのローファーはゆく夏の果てへと　高島市　くらたか湖春

薔薇の影へと向けられる人々のその眼に宿る炎の色よ　松本市　飛　和

はばたきも言語の一部鳥たちは風と契約しつつゆき交う　東京　石川　真琴

睡蓮を何度も描くモネのこと　掬えなかったひかりはどこへ　宝塚市　白川　楼留

告解は受け入れられずこの胸をかき乱すよう咲いた紫陽花　千葉市　星野　珠青

伊藤一彦 選

揺り椅子に雨の音聞く五月かな　春日市　林田　久子

レモネード妻とわけあふ立夏かな　山形市　佐藤美和緒

熊蜂の高き羽音に追はれけり　横浜市　相沢恵美子

花の塵掃き寄せ露店たたみけり　西海市　まえだいっそう

悪友の誰彼想ひ草矢打つ　神奈川　中島やさか

ぜんざいに塩ひとつかみ走り梅雨　津市　秋山　歩荷

花王なる牡丹に憑かれたかしの忌　越谷市　安居院半樹

面会の友の笑顔や麦こがし　直方市　岩野　伸子

ほそ長き厨の奥に白き影そば屋のあるじ遅き昼を食む　北広島市　富丘　治生

〈評〉描写の確かな歌で、その確かさを巧みに生かしている文体だ。読者は謎解きのように上の句から順に読んでゆき楽しめる。

潮騒を内耳のうちに飼ひながら遠き海なる戦をおもふ　大津市　碧乃　そら

〈評〉耳鳴りを潮騒にたとえ、上の句と下の句を「海」でつないでいる。主張もある。

白か黒か決着つかぬこの日々に菓子の袋が白黒になる　横浜市　豊田　迪子

排斥を叫ぶ世の隅で外国の介護スタッフの汗光りけり　須崎市　野中　泰佑

数万のなかの一人となり小さき「改憲NO！」のプラカード持つ　川崎市　椚田　宏明

憲法の集いに集まる人らみな高齢なれど表情若く　松戸市　加賀　昭人

葉脈が波打つほどにさくらんぼの樹の葉を濡らす激しい雨降る　山形市　新道百合子

特売の食材だけを買い込んでパズルのように決める献立　三条市　甘　辛

また一つできないことの増えた今日母の笑顔は変わらず優し　稲沢市　林田　りこ

背に15の子がエラーして敗退す私の夏のあの日のように　金沢市　竹内　一二

米川千嘉子 選

卵持ちて生まれし事もキュンとした痛みも忘れて女子会始まる　三重　中山由賀子

〈評〉排卵のこともその前後の痛みも遠くなって、別の身体、別の生を生きるよう。

後半生の「女子会」の軽やかさ。

種飛ばし子供に戻る初西瓜負けず嫌いの母懐かしく　名古屋市　加藤　國基

〈評〉若い母は負けじとスイカの種を飛ばしたのだ。屈託ない昭和の母子が浮かぶ。

図書室の貸し出し日付が昭和なる『中野重治詩集』を借りる　千葉市　佐藤　綾子

ボロボロのタオルが私のそれだろう仕事における尊厳とやら　福岡市　西田　浩之

夏夕ベボール蹴りあふ子らと父「トウチャントウチャン」呼ぶこゑ愛し　埼玉　酒井　忠正

毛布にて二階の小部屋目張りしてトランペットを素で吹く雨の日　吹田市　鈴木　基充

糠入れて灰汁ぬけるまでぼこぼことあれこれ茹でたき五月闇なり　会津若松市　ともりゆめ

君が居て生徒会での隣り席十八歳以来生涯を共に　横浜市　大建雄志郎

幼児語を優しい言葉と思ってか役所の人は我に説明す　東京　鈴木真理子

ファスナーを開くがごとく鴨の母こども引き連れ行く向こう岸　西海市　まえだいっき

加藤治郎 選

シャツの袖を少しまくって皿を洗う　いつか必ず朽ちる両手で　名古屋市　森本　有

〈評〉スケッチがよい。帰宅後でまだ着替えていない様子だろうか。半袖になる前の初夏を思う。下句はドラマチックだ。

はつ夏の縄跳びぐんぐん加速して少女はあおいえいえんとなる　垂水市　岩元　秀人

〈評〉少女はサイボーグのようだ。あおいえいえんの表記が美しい。抽象画である。

「しゃぶ葉が！しゃぶ葉が!!」ってバス停で友とはしゃぎ合う女子高生　横浜市　友常　甘酢

叱る母　自室にこもる　試験前　夜食のノック　返事できずに　東京　遠藤　最

あたたかなくちびるにふれ抵抗ができないままにとろけるアイス　東京　松　あき子

その鋏を置いて供述してほしいバルタン星の核戦争を　四日市市　早川　和博

屋上の人工芝に寝そべってどこまで駆けるおまえのこころ　神戸市　浅田　拓史

地球は青いし林檎は赤いしあなたは常に正しく丸い　東京　畑　えな

取水口付近のごみを取り除き次に水路のごみへと向かう　大津市　佐々木敦史

旅先の朝のビュッフェで迷わずにバナナを正しく食べている人　松戸市　小林　里純

うたは奏でる

・あなたがまはにきた来る風になり冬になりこの胸に来る　好き

・イルカショー（どうしてもしも別れたらといま考えた？）咲くように水

・スプーンのひかりはささやかな傷の重なり　桃のつめたいスープ

映像化された高揚感、あざやかな場面構成と比喩、細部へのまなざしと甘やかな痛み。ここに現れたのはテーマを恋に限定したからこその詩性だろう。いかにもまぶしい。（そめの・たろう＝歌人）

投稿規定　はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100－8051（住所不要）毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生（希望選者名）係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム（https://mainichi.jp/kadan-haidan/）でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。

こちらから投稿できます

おことわり　次回は16日に掲載します。